

《講演》

第 2 回 東京裁判研究会
「ノーマンと『戦後レジーム』
——近代日本を暗黒に染め上げた黒幕」

[編] 極東国際軍事裁判研究プロジェクト

期 日：平成 27 年 11 月 14 日（土）

講演者：岡部 伸

篠原：極東国際軍事裁判研究プロジェクト委員長の篠原です。本日は、第 2 回東京裁判研究会「ノーマンと『戦後レジーム』——近代日本を暗黒に染め上げた黒幕」という論題でお話を伺うことにします。講師の産経新聞社ロンドン支局長の岡部伸様をご紹介します。

岡部講師は、1959 年生まれ。1981 年、立教大学卒業後、産経新聞社に入社。東京本社社会部記者として警視庁、国税庁などを担当後、アメリカのデューク大学、コロンビア大学大学院に留学されております。そして 97 年～2000 年まで、モスクワの支局長。東京本社編集局編集委員などを経まして、2015 年 12 月。ですから、あと 2 週間後ですけれども、ロンドン支局長として旅立たれるということになっていて、今、とても慌ただしい準備をされておられるのですけれども、その合間を縫って今日の研究会で報告をしていただくことになりました。

ご著書に、『消えたヤルタ密約緊急電——情報士官・小野寺信の孤独な戦い』（新潮選書、第 22 回山本七平賞）、ほかに『「諜報の神様」と呼ばれた男』（PHP 研究所）。そして共著で、『貶める韓国 脅す中国』（産経新聞出版）という、さまざまな著作活動もされています。では、よろし

くお願いします。

岡部：今日は、ハーバート・ノーマンという人物についてお話ししたいと思います。なぜ、この話をさせていただくかという、先ほどご紹介にありましたこの本を3年前に書いたのですけれども、この本を分かりやすく言いますと、ヤルタ密約をストックホルムの小野寺武官がスクープしました。ソ連が参戦してくるという情報を会談の直後にスクープして日本に送ったとされるのですが、その電報が見当たらない。見当たらないので、なんとかしてその痕跡、あるいはそれにつながる証拠が無いものかと思い、ロンドンのイギリス公文書館、ナショナル・アーカイブに通って、そこで見つけた資料を中心に書いた本です。私はそれ以来、約5年間ですが、イギリスのアーカイブに通うことになりました。これは武官の電報なのですから、これだけではなく、たくさんいろいろな資料があります。今日ご紹介するのは、このナショナル・アーカイブにノーマンに関するファイルがありまして、それによって「では一体、何が分かるのか？」ということが、今日、お話しできるかなと思っております。

私の今の仕事をかいつまんでご紹介しますと、このイギリスのアーカイブで取得した資料をもとにしています。これは今年の8月9日、ソ連の参戦日に書いた新聞です。ソ連が宣戦布告電報で、宣戦布告をモスクワの佐藤尚武大使に告げました。それを、日本の佐藤大使がモスクワの電報局から送ろうとしたのですけれども遮断していた。ソ連が正式に宣戦布告をしたのは、実は36時間後だったという。そういうことが、アーカイブの「ウルトラ」と言うのですけれども、チャーチルが「金の卵」と言って非常に大事にした、イギリス公文書館のトップシークレットの日本の外交電報を傍受して解読した秘密文章に基づいて分かったという原稿です。

それと、後でまたお話ししますが、「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」と言うGHQが日本を洗脳した動きで、日本が二度と立ち上がれないようになる元になったものというのは、実は中国共産党

の日本の捕虜に対する洗脳工作だったのではないかということが、このノーマンファイルの中のエマーソンの証言録で分かったという話です。この日本人の捕虜の洗脳工作については、本日出席されております山本武利先生（一橋大学名誉教授）が非常に詳しく研究されているのですけれども、私はエマーソンの証言が実際にノーマンのファイルにあったということが面白くて記事にしたわけです。このように、イギリスのアーカイブで秘密文書を取ってきて、それを意味づけして日本のメディアで分かりやすく書いていくというのが、現在やっている仕事です。これからロンドンへ行っても、この仕事を中心にニュースを追っていきたいと思っています。

さて、ノーマンですけれども、皆さんご承知の通り軽井沢生まれのカナダ人外交官で、同時に日本史の研究者です。この右側に写っている写真は「ノーマンレーン」と言いまして、軽井沢に行かれた方はご存知かと思いません。ノーマンの父親ダニエルがカナダのメソジスト派の宣教師で、軽井沢町の村長さんのような役割を果たしていたため名付けられたようです。軽井沢はこういう道に「近衛レーン」とか「ノーマンレーン」とか名前を付けています。ですからノーマンは、非常に今でもゆかりがある人物として伝えられています。ちなみに「軽井沢幼稚園」も学校法人ダニエル・ノーマン記念学園という名前が付いていまして、今も軽井沢では名士として伝えられています。むしろ現在でも、著書の『日本における近代国家の成立』は日本の近現代史研究の古典とされて、丸山眞男氏などが「進歩的文化人」ということで敬意を表されて、評価されています。数年前には日本とカナダの友好促進に貢献した「功績」を称えて、「カナダトヨタ」がドキュメンタリーを作ったりしています。赤坂にある在日カナダ大使館には、「E・H・ノーマン図書館」と名前を付けています。それからカナダには無いのですけれども、日本では全集が4巻発刊されています。

ちょっとご説明しますと、ノーマンは軽井沢で生まれて、17歳で神戸のカナディアンスクールに行きます。そのあと、父親ダニエルの母校であるカナダのトロント大学ビクトリア・カレッジへ入ります。そのあと1933年か

ら35年にケンブリッジ大トリニティ・カレッジへ行くのですが、ケンブリッジのあと、もう1度カナダへ戻ってハーバード大、それからコロンビア大で、本格的に日本の研究を始めます。不思議なことに、日本では日本の研究者として知られているのですが、ケンブリッジへ行くまでは日本のことを全く勉強していません。ケンブリッジへ行ってから、むしろカナダに帰ってから、日本のことを勉強し始めています。のちほどご説明しますが、恐らくこれには、ある理由があったのだと思います。そこで日本研究をするうちに「太平洋問題調査会」というアメリカのシンクタンクに入りをして、1939年にカナダの外務省に入ります。カナダの外務省に入って、1940年に戦前の東京の公使館に語学官として来ます。何段階かあるのですが、これを第一段階と考えてください。戦前の日本でカナダの（語学官）通訳をしているときに、マルクス主義歴史学者で新左翼の革命理論家的存在となる羽仁五郎から日本の歴史、明治維新史を学びます。それが、のちに大きく影響を受けるようになったとされています。41年に戦争が始まりまして、駐日米国大使だったジョセフ・グルーなどと一緒にカナダに帰るのですが、カナダに帰ってもカナダの情報機関で対日のインテリジェンスをやっています。その後、戦争が終わるか終わらないころに、カナダ外務省からアメリカのGHQに派遣されるのです。これも、のちほど詳しくご説明しますが、日本語ができましたので、どうも当時では数少ない日本語ができる日本専門家ということで重宝がられて、GHQに引き抜かれるような形でGHQの対敵諜報部の調査分析課長という肩書で来ます。少佐待遇です。有数の日本研究者ということで、GHQの民主化政策に関わります。マッカーサーと昭和天皇の通訳を務めていますので、マッカーサーの右腕と言ってもいいぐらい、肩書以上の影響力があったのではないかとこのように思われます。民主化に関わったのですが、1950年ごろからソ連のスパイというような疑惑が浮上しまして、アメリカの上院司法委員会での証人喚問に呼ばれました。それは終わるのですが、その後もう一度、ハーバード時代の友人だった都留重人元一橋大学学長などが喚問されま

した。そして、ニュージーランド大使とかを務めたあと、エジプト大使を務めているときにカイロのビルから飛び降り自殺をします。1957年4月です。カイロで投身自殺をしたということで、マッカーシズムの犠牲になった悲劇の外交官というふうに言われてきたというのが、ノーマンの日本での一般的な評価だったのではないかと思います。

これが、イギリスの公文書館です。たまたま3年前に、公開されたばかりの「ノーマンファイル」という資料を見つけたのです。イギリスは共産主義に対して非常に警戒をして、MI6（秘密情報局）とMI5（情報局保安部）という2つの情報機関があるのですが、MI5という国内で防諜を担当する機関が作った共産主義者あるいは共産主義に同調者というファイルの中に、ノーマンのファイルがありました。資料をお返ししますので、ご覧いただければと思います。1933年から35年にケンブリッジに在籍した、その33年の段階で、モスクワのコミンテルンの本部から指令を受けている無線を傍受したという報告書です。「マスクマテリアル」と呼んでいるのですが、それがナンバー1ですが、その次に、MI5が「少なくとも1935年のケンブリッジの在籍中に、ノーマンが共産主義活動に関わったことは間違いない」という記述がありました。どういうことかと言いますと、33年から35年のケンブリッジ時代にノーマンが共産主義活動をやっていたということ、1951年にMI5からカナダの警察庁のような部署、「連邦騎馬警察（RCMP）」に送った手紙が右側です。そして、MI5の副長官に「スパイハンター」と言われている防諜の責任者、ガイ・リッデルという人物がいます。右がこのガイ・リッデルの日記です。ガイ・リッデルの日記も近年、公開されました。このガイ・リッデルの戦時中から亡くなるまでの毎日の動きが、これで分かります。1951年の段階で、なぜ、この文書がカナダに送られたのか？ 左は、MI5のガイ・リッデルからカナダの連邦騎馬警察に送った中身です。35年の卒業まで、ノーマンがインド人の留学生を共産党活動、コミンテルンの活動、秘密工作活動にリクルートする役割を行っていたということ、インドのインテリジェンスの機関が見つけて、MI5に通報して

MI5 が把握していたということを報告したのです。

なぜ 51 年になって、この手紙を送ったかと言いますと、ちょうど 50 年から 51 年にかけてアメリカの上院司法委員会の公聴会で、ソ連のスパイ疑惑でノーマンが追求されたわけです。イギリスは 35 年の段階で、ノーマンが共産主義活動に関わっているということを知っていたのですけれども、それをカナダ側に送っていませんでした。それは、いろいろな理由からだったと思います。そのことをガイ・リッデルは、「今、アメリカで問題になっているノーマンというのは、われわれが把握しているケンブリッジ・グループの内の 1 人の人物である。今、これを伝えるけれども、当時、伝えなかったのは間違いであった」というふうに日記に書いたわけです。ケンブリッジ・グループと言いますと、皆さん、ピンと来られる方もいらっしゃると思います。この手紙を送ったのは 51 年の 10 月で、この 51 年の 5 月に世界を震撼させる出来事が起きたのです。ノーマンと同じ時期に、ケンブリッジの中でもトリニティ・カレッジという、最も秀才が集まるところで同じ時期に在籍していた英外務省の 2 人の高官、ガイ・バージェスとマクリーンが、突然失踪します。2 人の失踪を皮切りに「20 世紀最大のスパイ」キム・フィルビー、「英美術界の重鎮」アンソニー・ブラント、「第 5 の男」ジョン・ケアクロスの素性が次々と暴露されます。イギリスの中でも最も優秀な男たち、ケンブリッジ・ファイブ、マグニフィセント・ファイブがソ連のスパイだったということは、その後、10 年ぐらいかけて明らかになるのですけれども、まず 2 人が 51 年の 5 月に失踪するのです。どこへ行ったか分からない。失踪して、「ソ連のスパイだったんじゃないか？」ということで、イギリスの中で内部調査と言いますか、もう一度、ファイルを洗い始めたのです。それで、ノーマンもケンブリッジ・グループの 1 人だということを、ガイ・リッデルは日記に書いています。そういうことが分かったので、慌ててカナダ側に通報したという、その手紙なのです。今、ご覧になっているのは現物です。その現物の手紙の写しが、そのままファイルとして残っています。ガイ・リッデルが書いているのは、「インファント・レフティズム」という言

葉なのです。「初期の共産主義の脅威」。つまり、「若いころに共産主義に走った脅威は、今、改めてガイ・バージェス、マクリーンの失踪で明らかになった」。だから、ノーマンについても同じ文脈で捉えたということが分かります。そして、もう一つ面白いのは、この日記の中に、ノーマンのことがここに出ているのですけれども、こちらのところにはキム・フィルビーも出ているのです。キム・フィルビーです。ケンブリッジ・ファイブの中で最も有名といいますか、最も優秀だった男がキム・フィルビーでありまして、1963年にソ連に亡命するまでMI6の長官候補だったのです。ここにはこの当時、1951年の段階で「フィルビーはおかしい」と書いてあります。おかしいけれども尻尾は出していないのです。フィルビーは、亡命する63年まで12年間二重スパイを続けます。リッデルは疑惑の一端をつかみ、フィルビーについて疑惑を書いているのです。フィルビーのことは疑惑を書いて、ノーマンのことは「実は35年の段階でわれわれは共産主義者だったということ断定した。それをカナダに伝えなかったのは残念だから、今すぐ手紙を書こう」と言って、10日後に書いた手紙がこちらです。

そのほかに、ガイ・リッデルMI5の副長官がケンブリッジ・グループの一員だと書いていたのには訳があります。実はその後、私が調査をして分かったのですけれども、これはカナダのコロンビア大学でPh.Dを取られたジェームズ・バロスというトロント大学教授が書かれた本『全くの悪気もなく——ハーバート・ノーマンのスパイ事件』です。このバロス教授によりますと、実はノーマンはケンブリッジに入学したときに、ガイ・バージェスとかなり親しい友人だったらしいのです。最初に入ったときにバージェスの反戦運動に勧誘されて、それ以来、バージェスがわれわれの仲間はずっと引き入れていたというのが、その後のMI5の調査で明らかになりました。

それから、アンソニー・ブラントという、これもケンブリッジ・ファイブの1人で美術史家です。アンソニー・ブラントだけは亡命をしないで、司法取引をして、ずっとイギリスに残りました。司法取引をした中で、ブラントは1964年に「ノーマンは、われわれの仲間だった」ということを言ってい

ます。なぜ、言えたのかと言いますと、バージェスの情報なのです。非常にややこしくて申し訳ないのですが、バージェスがノーマンと親しく、「われわれの仲間だ」ということを、ブランドはMI5の聴取に答えました。なぜ、答えたのかと言うと、バージェスとブランドは同性愛の関係だったのです。同性愛関係は、かなり有名な話で、ピロートークと言いますか寝物語で聞いたということを言っています。それぐらい、ノーマンはケンブリッジ・ファイブにかなり近い存在だったということが明らかになっています。あと、もう一つあります。1962年末にKGB大佐の元NATO担当だったアナトリー・ゴリツィンがいて、ヘルシンキに亡命しました。彼は、ケンブリッジ・ファイブの存在を暴露するのですが、そのときに、「ノーマンも共産主義者でエージェントだった」ということを、はっきり言っているようです。

こういうようなことが、イギリスのアーカイブの文書で分かったわけなのですけれども、では、ノーマンが共産主義者だったということが分かって、どういうことが言えるのでしょうか？ ノーマンの最も有名な本は、『近代日本における国家の成立』という本なのですけれども、この本は、日本が戦前まで封建要素が残るいびつな近代社会だったと糾弾して、日本が中国大陸で戦争をしているのは、明治維新後一貫して専制的な軍国主義国家であったからで、反封建的な絶対主義の天皇制がずっと残っていて、悪いのは全て日本と切り捨て、「日本を解体すべき危険なファシズムの国だ」ということを強調されている気がします。これが、日本を弱体化させる占領軍の占領政策に、ぴったり合致したということです。そして、マッカーサーを始めとするGHQに、ゆがんだ歴史認識を植え付けたのではないかと思います。

これ、左がマッカーサーとノーマンです。右が、有名な昭和天皇との会談の写真です。この通訳を務めたのもノーマンです。GHQの誰よりも早く昭和天皇とマッカーサーが会見するということを知ったのも、ノーマンだったようです。ノーマンは相当、マッカーサーの右腕として関わっていたということが言えるのではないかと思います。この左の写真が、それを

象徴しているというふうに思います。それが言えるのは、次のこの本に、こんな記述があるからです。マッカーサーが戦後、回想した『大戦回顧録』です。「日本の実態は、西洋諸国が既に4世紀も前に脱ぎ捨てた封建社会に近いものであった。神人融合の政治形態は、西洋社会では3,000年の進歩の間にすっかり信用されなくなったものだが、日本ではまだそれが存在していた。神人一体の天皇は絶対君主であって、アメリカ人から見れば、日本は近代国家というより古代スパルタに近い存在である」と、こういう記述があるのです。

これは、ノーマンの史観に非常に近いのではないかというふうに思います。「支配者は、侵略主義の天皇制の軍国主義者だ」。それから、「太平洋戦争自体が世界平和をかく乱する邪悪な戦略戦争だ」というような、日本を悪者におとしめる理論だったのではないかという気がします。これはやはり、日本共産党の講座派の歴史観と非常によく似通っているのではないかというふうに思います。これが取りも直さず、戦後の日本人の精神を、敗北主義と言いますか、敗戦主義と言いますか、自虐史観と言いますか、そういうものにつながっていくのではないかという気がします。これはのちほどご説明しますけれども、アジアへの加害者責任と言いますか、アジアに対して加害者としての責任を果たしていないという自虐史観。それから、謝罪外交を抱かせるという戦後レジームを生み出していったのではないかというように思います。これが現在も中国、韓国が、慰安婦や南京で反日プロパガンダを繰り返す、ある種、元凶になったのではないかという気がします。

では、ノーマンは一体、どんなことをやったのかということなのですが、最も早く取りかかったのは憲法のことだったのではないかというふうに思います。ノーマンは戦後すぐ、1945年9月の始めに早々と来日しています。真っ先に行ったのが、旧知の経済学者で親友だった都留重人とともに、戦前に語学官として来たときに知り合ったマルクス憲法学者、鈴木安蔵を探し出します。鈴木安蔵さんというのは、世田谷の池尻に近い駒留神社の近くにお住まいで、今もご遺族といますか、娘さんたちがお住まいです。

敗戦から1ヶ月余りの9月22日、そこにGHQのジープで乗り付けて、真っ先に鈴木安蔵さんのところに行きます。日本で最初にやったのが広州から復員したばかりの鈴木安蔵さんを訪ねたことです。これは、鈴木安蔵さん自身が回顧しているのですけれども、ノーマンが来まして、「今こそチャンスだから、本当の憲法を作り直すべきだ。それをなすするのは在野の憲法史家・鈴木さんあなただ。あなたがやらんでどうするんだ？」というようなことを鈴木安蔵さんに言ったようです。それから「憲法研究会」という民間の憲法試案を作るグループができて、そこで実際の草案作りを始めるのです。私がここで申し上げたいのは、そもそも鈴木安蔵さんが自分の意思で行ったのではなくて、発端はノーマンなのです。ノーマンが訪ねて初めて、鈴木さんはこういったアクションを起こしたということです。

9月の初めに勧誘されて、その後、10月東大教授だった高野岩三郎を会長に憲法研究会ができました。その後も、日比谷の総司令部にノーマンを訪ねていろいろと指導を受けたということを、鈴木さんが戦後、回想されています。そのことを憲法調査会でも発言されていまして、小委員会の第21回議事録に、ノーマンとの会話の中で、ノーマンは天皇制を廃止して共和政の憲法を作れというようなことを言っていたようですけれども、鈴木安蔵さんが「やはり、いきなり共和政はできない。立憲君主制案で行くしかない」と言うと、ノーマンから「それで日本の民主化ができるだろうか？」という懐疑の言葉を言われたということを、この憲法調査会で証言しています。

『^{しんせい}新生』という雑誌があったのですが、1945年の12月号に鈴木さんご自身が書かれているのを、読み上げます。これはノーマンの言葉で、ノーマンが天皇制、国体を批判して言ったそうです。「国体の名のもとに、あらゆる反動的勢力は横行し、封建的帝国主義的政策が強行されてきたことを考えるとき、もし依然、国体問題を無批判のままに放置するならば、再び国家主義的勢力ないし風潮が国体護持の名分の下に結集し、強化する危険がある。徹底的に『国体』の根本的批判をなさしむべきが、日本民主主義化の前提と思ふが如何」と。つまり、国体、それから天皇制を徹底的に批判して、それを

改めることが日本の民主化だということを、再三にわたってノーマンが鈴木安蔵さんに指導と言いますか、伝えたということのようです。ご自身がこういうものにお書きになっているので、間違いないと私は思っております。

この遠山茂樹さんがまとめています『自由民権百年の記録』にも、こういうような記述があります。あるときノーマンに鈴木が、「君たちの憲法草案も共和政ではないが、どういうわけだ」と質問された。しかし、「今の状態でいきなりそれを持ち出しても、国民的合意を得ることは難しいんだ」と答えたところ、「今こそチャンスなのに、またしても天皇が存在する改革案なのか」と厳しく反論されて啞然となったことを、鈴木さんが回顧されています。この憲法研究会の会長の高野さんは、研究会案とは別に試案の草案を作っています。それにははっきり、「天皇制を廃止して、大統領制を導入すべきだ」というようなことが書かれていました。

よく言われるのですけれども、この鈴木安蔵さんが書いた『憲法研究会案』というのは政府案よりもひと月早くできて、しかも天皇の権限は大幅に縮小して、国民主権だったということです。どうも、これをもとにGHQが作ったので、日本人の自発意思による民主的憲法だと言われます。そのために、鈴木安蔵さんが間接的な起草者というようなことが言われているのです。GHQがなぜ、すぐにこれを受け入れて、これをもとに作ったかということ、実はこれもノーマンが、来日直後から民政局の法規課長だったマイロ・ラウエルに、日本には非常に古くから民主主義的に憲法を研究している学者がいるとして、鈴木安蔵さんのことを評価してラウエルらに伝えていたのです。この事は鈴木さん自身が憲法調査会で「ノルマン氏が総司令部の人たちに日本に民主主義的伝統があり、ミスター鈴木は研究していたと教えていた」と証言しています。このラウエル、ニューディーラー派の人物なのですが、鈴木安蔵案が出た段階で評価をするという土壌、根回しが、どうもノーマンの手によってなされていたのではないかという感じがします。そういうことで憲法草案というのは、そもそもノーマンからの働きかけによって鈴木安蔵さんが作ったということで、日本人の自主的な意思で作成したと

は思えないというのが、私の考えです。

憲法の次にノーマンがやったことを、もう一つお話し申し上げます。これも、来日して約1か月後の10月の2日、3日だったと思います。府中の刑務所に投獄されていた日本共産党の徳田（徳田球一）と志賀（志賀義雄）ら共産党の幹部に、面会に行っています。これは、ジョン・エマーソンという旧知のアメリカの外交官と一緒にしています。このエマーソンは知日派ではありますが、どうも知日派ではなくて、むしろ親中反日の外交官だったように思います。毎日新聞の大森実さんが、かなり詳しくインタビューをして『戦後秘史4 赤旗とGHQ』で残しています。日本通ではありますが、どちらかという当時のニューディーラーの考えである、親中派の外交官だったようです。このエマーソンと一緒に府中を訪ねて、釈放の前共産党幹部に接触して、彼らを日比谷のGHQの本部にGHQの車で連れて行って2日か3日ぐらい、この共産党幹部の目を見た改革案というか民主化案を聞いています。具体的には、「どの人物をバージしたほうがいいか?」「どういう社会改革をすればいいか?」ということ、共産主義者の目で聞いて事情聴取しています。その後、事情聴取して2~3日経った10月4日民権指令が出て、釈放されています。釈放されたあともノーマンは彼ら共産党幹部と接触を重ねておまして、須田と志賀ら日本共産党は米国主導の占領軍を「解放軍」と感謝し、GHQの「民主化」という名の「共産化」を熱烈支持します。初期GHQと共産党が蜜月状態にあった背景にノーマンの存在があったといえると思います。この左が、アメリカのアーカイブに残っていた、GHQの前を歩く徳田と、これは野坂（野坂参三）です。もう日本に帰ってきてからですから、恐らく次の年（1946年）かなと思います。このような形で共産党の幹部を釈放しています。志賀義雄さんは、その後、日本共産党初の代議士になったりもしています。こういう形である種、日本共産党の復活に手を貸したのではないかということが言われております。それから民生局（GS）のケーティス次長の下、共産党の情報で、都留重人、それから羽仁五郎らとともに、公職追放のリストを作ったとされています。これが、メディアや教育

界、それから政財界の20万人をも公職追放するということになっています。

それから元首相近衛文麿の自殺についても、ノーマンは深く関わっています。近衛も憲法の試案を作っていたのですけれども、やはりノーマンとすれば、近衛にだけはどうしても作らせたくなかったのかもしれませんが。戦犯調査をして起訴するために作成した「戦争責任に関する覚書」の近衛に関する筆鋒は鋭いです。その背後といたしますか、その過程には都留重人と、都留重人の係累にあたる木戸幸一内相が深く関わったのではないかというような見方も持っています。広い意味で、自殺に追い込んだのではないのかというような言い方ができるかと思います。「じゃあ、どうしてか？」というと、考えられるのはあの有名な近衛上奏文で、近衛さんは、当時の中枢の中に共産主義者、あるいはソ連のコミンテルンに共鳴、あるいは内通している人たちが増えているということ、この上奏文の中で訴えて昭和天皇にも働きかけをしていたことをノーマンは、もしかしたらマッカーサーに進言されたくないと考えたかもしれないと思います。そういうことから近衛が疎ましくなって、ノーマンはそういった自殺に追いやったのではないかという見方もできるのかなというふうに思います。

その次に、先ほどご説明させていただきましたエマーソンの証言録です。これもノーマンファイルの中にありました。ノーマンがカイロで自殺する一月前の1957年3月に上院司法委員会での証言録です。エマーソンが1944年の1月から重慶に、10月から延安に足を延ばしました。ディクシー・ミッシェンで延安を訪れて、そのときに野坂がやっていた日本人捕虜の解放政策といたしますか洗脳といたしますか、日本人捕虜に戦意を喪失させて、軍国主義は悪いと言わせる。日本人に侵略者としての罪悪感を植え付ける洗脳工作に、非常に驚きました。「対日政策に、延安での体験が生かせると思った」というふうに上院で証言しているのです。その日本政策には、2つ意味がありました。1944年の段階ですから、「早く降伏に追い込むこと」と、「降伏させたあと、どうやって自分たちが思うように占領政策ができるか」という2つの意味があったと思います。これはエマーソンが大森実のインタビュー

に答えています。

日本の政策を遂行する上で、「これは非常に役立つと思った」ということを証言しています。これは取りも直さず、江藤淳の『閉ざされた言語空間』で指摘された「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」のことではないかというふうに、私は思います。江藤淳さんが本の中でお書きになっているのは、アメリカ軍、GHQがやったのは、1945年の真珠湾の12月8日に、『太平洋戦史』というのを全新聞に連載を開始させ、それからラジオで「真相はこうだ」ということで、いわゆるアメリカ軍の都合のいい、アメリカ軍が見た戦争史を、日本人に刷り込むことを始めるのです。例えば、大東亜戦争を使わせないで太平洋戦争という名前にさせるのも、ここからなのです。江藤淳さんが言っているのは、悪い軍国主義者と悪くない国民を二分して、軍国主義者が悪かったからこういう戦争になって負けてしまったと。どうも日本とアメリカとの戦いを、軍国主義と国民との戦いにすり替えてしまうという、この二分法の刷り込みというのが、ここから始まったのではないかということを、江藤淳さんはお書きになっているのです。

これがエマーソンです。エマーソンが延安で中国共産党の日本捕虜への心理戦が占領政策に役立つと証言した内容、その彼が見たものというのは、まさにGHQが取り入れたウォー・ギルト・インフォメーション・プログラムだったのではないかというように思うわけです。このエマーソンが証言している「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」というのは、その後の東京裁判とか、あらゆるところで日本人の加害責任と自虐史観を刷り込むということに非常に役立っていったのではないかというように感じるわけです。

ご承知の通りGHQの占領政策というのは、朝鮮戦争が始まって冷戦が始まると、「逆コース」と言われる、占領初期のニューディーラーたちから政策が変わります。変わると同時にノーマンの影響力というのも、失われていったようです。その後、先ほど申し上げましたように、51年からアメリカの上院の司法小委員会でソ連のスパイ容疑で、糾弾が行われまして影響力

を失っていました。ところが、ベトナム戦争が終わった75年ごろから、『敗北を抱きしめて』でピューリッツァー賞を取ったアメリカの著名な学者ジョン・ダワー・マサチューセッツ工科大学教授がノーマンを再評価する形で、ノーマン理論が復活します。

その背景には、アメリカのニューレフトと言われる人たちがベトナム戦争のあと、共産化がアジアで進むと思ったところ、インドネシアの共産クーデターが失敗してから、反共のASEANができて、共産主義の強化、いわゆる資本主義の弱体化が彼らは必要だというふうに考えたのです。そこで資本主義の弱体化のためには、ノーマンが唱えた過去を反省できない侵略をする日本弱体化のノーマン理論というのが非常に都合が良かったため、この考えが彼らの中心になったようです。その中心人物が、どうもジョン・ダワー教授だったのではないかというふうに思います。その考えが、同じころに日本でも伝わります。ダワー教授が言っているのは、アジアの民主化には日米同盟を解体して、日本を弱体化する。アジアに対して日本は、もっともっと謝罪しなくてはいけない。東京裁判が中途半端に終わったため、天皇の戦争責任を改めて追及して、未完の占領政策を徹底しなくてはいけないというようなことを唱え始めたわけなのです。

80年代ごろから、日本に謝罪と反省を求める反日組織というのが、中国や韓国、あるいはアメリカに生まれました。例えば、昨今の慰安婦像をカリフォルニア州などアメリカに各地に設置する運動をしている在米中国人による「抗日連合会」というのがあるのですけれども、この抗日連合会ができたのも、このころです。アイリス・チャンに『レイプ・オブ・南京』を執筆させたのも、この抗日連合会です。あと、ドイツのジョン・ラーベの日記を発掘し、映画を作らせ、ドイツを「南京大虐殺」キャンペーンに巻き込んだのも、彼らが支援をしたためという話もあります。こういう形で、世界で反日国際ネットワークができてくるのです。

90年代に入って本格的に、慰安婦と南京のキャンペーンが始まります。今日は慰安婦の問題を話すのが中心ではないので省きますけれども、どうも

このころから、反日ネットワークといますか、反日の活動というのが活発に行われるようになったのです。日本では、家永さんの教科書検定の裁判を支援する運動とか、ピースボートの運動というものがあって、そういったものと世界の反日国際ネットワークが連動するような形で始まります。現在もこれがノーマンを再評価する形、一種の日本を悪玉にするという日本悪玉論というのが世界で広がっているのではないかと思います。今でもその中心なのが、ダワー教授たちではないかと思います。この5月にもジョン・ダワー教授は「日本は行き過ぎた愛国主義の存在がある。そのため、アジアに対して反省できない。だからもっと真摯に、もう一度向かうべきだ」ということをおっしゃっています。加害者責任をもう一度、戦後70年に感じ取って、日本はもっともっと反省しなくてはいけないということを言っています。

残念ながらノーマン理論が元になって、今も日本を弱体化させるという動きが世界で広がっているということが、私は非常に残念です。本来ならば日本の味方といますか、知日派として日本をここまでおとしめてほしくないというのは、日本人としては当然だと思います。最後に、では誰がノーマンを、このような反日といますか、反日研究に向けたのかというと、ジェームス・バロスの『全くの悪気もなく』によると、ケンブリッジからカナダに帰るまで彼は全く日本研究をしていないのです。ケンブリッジで専攻したのはヨーロッパの中世史です。中世のヨーロッパの歴史を学んでいて、日本研究はやっていません。ケンブリッジを終えてから、ケンブリッジで共産主義活動をやって共産党に関わったあとカナダに帰って真っ先にやったことが、共産党活動なのです。日本の侵略に抵抗して中国の左翼革命を支援する「中国人民友の会」の初期として中国革命運動のつながりができます。誘い込んだ人物というのが、冀朝鼎キョウウテイという男なのです。冀朝鼎というのはアメリカのベノナ文書で、ソ連の息の掛かったソ連の工作員だったということが、はっきり書かれています。もともとは中国共産党の人物だったのですが、それを隠してアメリカで教育を受け、国民党政府の財務部長（大臣）アドバイザーとして蒋介石政権に関わっています。どうも、ハーバード大学院

時代やカナダ外務省、東京での占領政策など節目節目でノーマンと接触をして、ノーマンに指示を与えていたようです。ということは、今広がっている中国の日本に対する歴史戦というのは、戦前の1940年代から、こういう形で日本に対して仕掛けられたとも考えられます。私としては、本当に背筋が寒くなるような思いがしてなりません。

先日の、ユネスコの南京の記憶遺産もそうでしたが、やはり日本としては今、心をつつにして、隻眼の目ではなく本当に自分たちの目で診断をして立ち向かっていかないと、この国際社会を渡っていけないのではないかと危機感を持っています。南京だけではなく慰安婦の問題も、2年後に記憶遺産登録されるかもしれません。反論しないと日本は、どんどんどんどん中国との歴史戦での弱い立場に追いやられ、世界の中でおとしめられていくのではないかという思いがしてなりません。以上、イギリスの文書から見たノーマンの話を見せていただきました。お話しを聞いていただきまして、ありがとうございました。

篠原：どうもありがとうございました。これからご質問の趣旨をご紹介します。いただいて、ご回答ということで進めさせていただきます。

岡部：まず、「なぜ、エマーソンとノーマンが結び付いていたのか？ エマーソンは延安では、ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラムを学んだという文書が出ていない。エマーソンは鹿地亘、野坂、大山郁夫による反戦日本人の糾合の画策をしていたのではないか？」について、まず、エマーソンとノーマンは、なぜ結び付いていたかということ、もともと戦前から外交官同士で交友はあったようです。大森実さんのインタビュー『戦後秘史4 赤旗とGHQ』で、「私はニューディーラーの支持者だった」とはっきりと答えています。エマーソン自身がノーマンの思想に近かったということを認めているのです。だから、「制裁的な占領政策をする」という意味で、最初からノーマンとタッグを組んでやったのではないかと思います。

それから、確かに延安ではウォー・ギルト・インフォメーションとは述べ

ていませんが、江藤淳さんが書かれていることからすると、一致するので、概念的には、そこで学んだのではないかと私は思いました。これも大森実さんのインタビューに答えているのですけれども、エマーソンは「まず、日本人の反戦組織を作らせて早く終戦をしようとした」、それとともに「その後のことも考えた」とも答えているのです。その心理作戦として、①日本に降伏を勧告するための宣伝、②戦後に対する心理作戦、の二つを目的とした。「延安で学んだ心理作戦を終戦と戦後処理に生かす」と言っているため、ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラムをやるとは言っていないけれども、延安で学んだことを占領政策で生かそうと思っていたと解釈しました。あくまでも可能性ということで、断定しているわけではありません。資料をどう見ていくかということが、大事なのではないかと思います。大森実さんの『戦後秘史4 赤旗とGHQ』インタビューで、「鹿地亘たちに反戦組織を作らせるだけじゃなくて、戦後に対する心理作戦を大山郁夫ら日本人にやらせようと思った」とはっきり言っています。それは結構、重要だなと思っています。ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム自体が、はっきりとしたものではなかったのではないのでしょうか？ はっきりとしたものがあれば定義づけますが、そうでないならば、現在ある情報の中で真実を探っていくのが、われわれジャーナリストとしての仕事であって、文書に書かれていないから判断できないと決めるのは、逆に私は良くないのではないかと思います。ですから、お話ししているのは、あくまでも私の解釈という事ですので、ご参考にしていただければと思います。ただし、客観的に延安でエマーソンが活動した中国共産党の洗脳がGHQが行ったと考えられることは事実だと思えます。

「近衛の自殺について。近衛の自殺はノーマンが原因であるとは、その証明が不足していると思います」について、私はノーマンが、近衛の戦争責任をはっきり「覚書（メモ）」で書いたというのが大きいと思います。近衛を起訴して除去すべく「戦犯調査」の権限を濫用したことは、鳥居民氏の『近衛「黙」して死す』、工藤美代子氏の『われ巢鴨に出頭せず』でも明らかで

す。戦争責任を紙によって報告書で出されたということは、近衛にとってはすごく大きかったのではないかと思います。

それから、「ノーマンはホイットニー、ケーディス、ウィロビーにどのような影響を与えていったか？」については、今日、ウィロビー GHQ 参謀第2部 (G2) 部長についてはご紹介しませんでしたけれども、ノーマンがカナダ外務省に入ったあとも、カナダの外交クーリエを使って、太平洋問題調査会の資料、コミンテルンの資料を送っていることをウィロビーが証言している資料があります。ですから彼は GHQ の中で一番、ノーマンがソ連のために何かをしているということに気付いた人物で、それを阻止しようとしていた。それからケーディス GHQ 民生局 (GS) 次長は、ケーディスの下で一緒にいろいろなことをやっていました。例えば、戦犯指定とか、あと公職追放です。

ノーマンは、憲法の作成そのものには関わっていませんが、間接的には影響力を与えたと思います。分かっているのは鈴木安蔵さんを通じて。鈴木安蔵さんには相当な働きかけをして共和制に近い草案を作らせようとしたと思います。

「天皇制についてマッカーサーは「残すべきだ」という意見でしたけれども、ノーマンがどのような影響を与えて指示したのか」について、ノーマンは戦争中、太平洋問題調査会で「天皇制は廃止すべきだ」ということを、はっきり明言しておりますが、GHQ でそれを発言したという資料は、私は持っていません。しかし、彼の思想はそうではなかった。つまり共和制。天皇制を廃止しなければいけないというのは、残された文献を読めば、読みとれます。しかし GHQ の資料の中で、それをはっきりと明言したものは、私は見ていません。

「木戸が近衛の A 級戦犯を仕掛けるモチベーションは？」について、やはり木戸と近衛というのは、ある種、ライバルだったのではないかと思います。やはり、どちらかという開戦責任というのは近衛も問われたのですが、戦争責任はどちらかという木戸のほうにもあったのかもしれないで

す。その自分の責任を回避するために近衛を追い込んだのではないかと
ふうに推測できます。

「ノーマンの背後に国家的、国際的機関の存在があったのではないかと感
じます。単なる米ソ英などの戦勝国だけではないと思います」について、
MI5の資料のように、ノーマンがケンブリッジ・グループのケンブリッジ・
ファイブに連なる人脈で、そういった人物であったとすると、当時、真剣に
コミンテルンで、そういう社会体制が来るということを本当に考えていたの
ではないかと思えます。モスクワにいたので、彼らの国際共産主義運動をど
うしてやっていたかというのを、肌で学んだ経験があります。ただ、GHQ
の中にいたときに、そこまで日本を変えようかというように思っていたかど
うか、どこまでソ連の指令によって動こうとしていたのかということは、よ
く分からないのです。これは推測の域を出ないのですけれども、冷戦が始ま
る前ですから、国民主権の憲法を作って、いつでも改正できるということ考
えていたとすると、やはり将来的には共和制のような国家体制を日本も
取って、ソ連に近いような国というか、ソ連の仲間のような国にしようとし
たのかもしれないと思っています。

先ほどの話を、『歴史通』の2015年7月号に書きました。冀朝鼎のこ
とも、ちょっと書いています。ここに詳しく書いていますので、もしよろし
ければ、これをご覧ください。

「ノーマンが日本の歴史や制度に深い関心があるならば、日本の武士道精
神などは、どのように見ていたのでしょうか?」。について、ノーマンは農
業を中心とした無階級社会を理想とした思想家の安藤昌益の研究者として知
られていて、農民から見た日本の歴史とか日本の文化とかということは研究
されていたようだけれども、武士道については、多分、ほとんど理解して
いなかったのではないのでしょうか。軽井沢に生まれましたけれども、外国人
のコミュニティで育ち、神戸のカナディアンスクールなどに行っていますか
ら、はたしてどこまで本当の日本文化の神髄を理解したのかという気がしま
す。

「中国との歴史戦は、このあと日本国民としてどのように扱っていけばいいのか？」について、報道の現場で今活動しているのですが、彼らのプロパガンダというのは、すさまじいものがあります。今度、日本が「ジャパン・ハウス」というものをロンドンに作って、次はロスに、サンパウロに作って、ソフトパワーでなんとか対抗していこうとしています。百倍から千倍ぐらいのお金をかけています。ソフトパワーですら、それぐらいの違いがあるのです。ですから、今回のユネスコ記憶遺産登録された南京大虐殺の問題にしても、声を挙げて反論しなければ、それが真実になってしまう。どんどん日本人として主張を発信して、反論をする事を、外務省に日本国政府として、ぜひ、やってほしいと思っています。私はメディアの立場でやっていますし、これからもやろうと思っています。彼らに負けないように、彼らが千倍で来るなら、私達も気持ちだけは千倍で立ち向かっていかなければいけないのではないかと思います。

それからロンドンのアーカイブなどを見ても、中国人の若い研究者が年々、増えているのです。歴史戦については根こそぎ、その資料を取って行ってやろうというか、原資料を取って、日本よりも早く発表して自分のものにしようという、そういう意気込みが感じられるのです。行くたびに感じます。遅くまで残って調べているのは、中国人ばかりです。それを見ると、本当に背筋が寒くなります。だから本当に、日本の中で争っている場合ではないです。国内で、メディアの中で争っている時代では、もうないのです。少なくとも一致団結して立ち向かわないと歴史戦に勝ち目はありません。

「ノーマンが天皇、マッカーサー会談の通訳をしたのは、その時点でGHQ内部に共産主義者のスパイがいたことを示しているのでしょうか？」について、ノーマンが本当にソ連のスパイであったならば、そういうことも言えるかと思いますが、私自身、どこまでソ連のためにノーマンが働いていたかということが、よく分かりません。資料で見ると、ケンブリッジ・ファイブの連中と同じような土俵で同じような考えでやっていたということは言えると思います。しかし、ケンブリッジ・ファイブのキム・フィルビー

のように、情報をソ連に筒抜けで渡したかということは、私が持っている資料の中では言えません。ただ、大ざっぱに言えば、ソ連のような国にしたいと思っていたのではないかという感じは受け取っています。

篠原：これを持ちまして、第2回の東京裁判研究会を終了とさせていただきます。本当に今日は講師の岡部様、どうもありがとうございました。